

《 論 説 》

幕末期におけるオランダ式軍事訓練の歩行の特徴について

—日本古来の歩行との比較を中心として—

谷釜 尋徳

1. 問題の所在

近代以前の日本人の歩行は、今日のそれとは多少異なっていたといわれている。かつての日本人は、「同側上下肢が同時に出る」⁽¹⁾と説明されるいわゆる「ナンバ」の姿勢で歩いていたというのである。この「ナンバ論」の是非はともかく、フランスの社会学者モースがいうように日常の習慣的な身体動作には社会的・文化的影響が色濃く反映されているとすれば⁽²⁾、ヨーロッパ近代の文化を積極的に受け容れる前の日本人が日本特有の文化によって醸された歩き方を持っていたとしても何ら不思議ではあるまい⁽³⁾。

演劇評論家の武智鉄二によれば、日本古来の歩行（＝ナンバ）が、手を前後

(1) 渡会公治『「ナンバ」歩きを考える1』『トレーニング・ジャーナル』253号、2000.11、69頁。

(2) モース『身体技法』有地亭・山口俊夫訳『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂、1976、121～156頁。

(3) ただし、近代以前の日本人が今日言われるような「ナンバ」の姿勢で歩いていたと現段階で断ずることはできない。なぜなら、これまで日本人の「ナンバ歩き」を史料に基づいて明確に指摘した研究は見られないからである。そのような関心から、以前筆者は訪日外国人の見聞録を手掛かりとして幕末～明治初期頃の日本人の歩行の特徴を検討した（拙稿「幕末～明治初期における日本人の歩行の特徴について―訪日外国人の見聞録を手掛かりとして―」『日本体育大学紀要』36巻1号、2006.9、1～18頁）。その結果、「ナンバ」を指摘した見聞録には巡り合えなかったものの、西洋人の眼差しが日本人の歩行を明らかに異質なものとして捉えていたことが確かめられた。それゆえに、筆者は近代以前の日本人の歩行は幾分「近代化」（＝西洋化）された今日の歩行とは少なからず異なる特徴を有していたと考えている。

に振って反動をとり手足の左右交替の動きで前進する「近代的」な歩行へと変化した直接的な要因は、明治期において義務教育の中に採り入れられた兵式体操⁽⁴⁾に求められるという⁽⁵⁾。この兵式体操は初代文部大臣の森有礼を立役者として勃興したものであったが、その中には西洋の軍隊式の「歩行訓練」が含まれていたからである⁽⁶⁾。

また、評論家の三浦雅士も兵式体操に触れて「学校教育におけるこの徹底した身体管理のもとで、日本人の伝統的な身体所作は失われてゆくほかなかつ

(4) 兵式体操について『最新スポーツ科学事典』は次のように説明している。

「陸軍の歩兵操典や体操教範を基礎にして明治の中頃に編成された体操。その内容は、柔軟体操、各個教練、器械体操など、軍隊式の体操や訓練がその中心になっていた。明治 18 (1885) 年より学校教育に導入された歩兵操典は兵式体操と改称され、富国強兵政策のもとその普及が図られた。(中略)当初、兵式体操は国民教育の積極的手段として位置づけられた。しかしその後、陸軍との結びつきを急速に強め、軍事訓練の性格を強めていった。兵式体操の導入は、学校教育に対する軍部の発言力を著しく増加させ、昭和初期の教育の軍国主義化へとつながっていった暗い歴史を持つ。」(『体操』『最新スポーツ科学事典』平凡社、2006、631 頁)

(5) 武智鉄二『舞踊の芸』東京書籍、1985、273～274 頁。

兵式体操の実施状況については、明治 23 (1890) 年に来日したハーン (=小泉八雲) の『英語教師の日記から』の一節によって知ることができる。

「帰宅の途中、城を通り抜けて近道をする、可愛らしい光景にぶつかることがある。着物姿に、草履ばき、それに帽子なしのいがり頭の男の子がおよそ三十人ばかり、これ又着物姿の整った顔立ちの若い男の先生から、行進の仕方と歌を教わっている。子供達は歌いながら列をつくり、小さな素足で拍子を取る。先生の声は綺麗な明るいテノール。列の先頭に立って歌の一節だけ歌う。すると子供達が後について歌う。先生が二節目を歌い、子供達が繰返す。どこか間違うとやり直しである。」(ハーン「英語教師の日記から」奥田裕子訳『小泉八雲作品集 1—日本の印象—』河出書房新社、1977、109 頁)

ハーンがみた松江の子どもたちは、教師から歌のリズムに合わせて「行進」することを習っているのであるが、このことは、当時の日本の子どもたちが訓練しなければリズムに合わせて歩くことができなかったことを意味している。ともあれ、このようにして兵式体操の中には「歩行」の訓練が含まれていたことがわかる。

(6) 明治 19 (1886) 年、小学校に「隊列運動」、中等学校以上に「兵式体操」が導入されることになったが、スポーツ史家の岸野雄三はこのことを指して「体育というよりも道德教育、さらにははっきりいえば学校教育の軍隊化でもあった。」(岸野雄三「明治第二期の体育—兵式体操の勃興—」『近代日本学校体育史』東洋館出版社、1959、23 頁)と述べている。なお、小学校の「隊列運動」は明治 21 (1888) 年に「兵式体操」へと改められたが、そこで想定されていた内容は同年発行の『小学校用兵式体操教範』(柳明義、正宝堂)によって知ることができる。

た」⁽⁷⁾と指摘しているように、兵式体操が日本人の歩行の近代化に果たした役割は大きかったといわねばならない⁽⁸⁾。

ところが、その歴史を遡っていくと、こうした西洋式の軍事訓練は明治期以降になって日本に移入されたものではなく、開国を迫る西洋諸国からの圧力への対処として、幕末期においてすでに幕府をはじめ諸藩によって採り入れられていたことがわかる。この訓練の初歩的段階に「歩行」の訓練があった。近代以前の日本人の歩行には西洋人と異なる特徴があったばかりか、集団で隊列を組んで歩調をそろえて移動するような習慣もなかった。それゆえに、軍隊式(＝西洋式)の歩行を習得することなくしては近代的軍隊の体裁を整え、欧米列強に対抗することは不可能だと考えられていたのである。この西洋式の訓練で教授された軍隊式の歩行とは、いわゆる「ナンバ歩き」とは異なり、基本的には右足が出ると左手が前に出るという今日の日本人の一般的な歩き方に近いものであった⁽⁹⁾。したがって、日本における歩行の近代化の端緒は幕末期に行われた西洋式の軍事訓練にまで遡ることができるといえよう。

こうした観点から、本稿では日本人の歩行の近代化という現象を理解するための基礎的作業の一環として、幕末期における西洋式の軍事訓練に含まれてい

(7) 三浦雅士『身体の零度―何が近代を成立させたか―』講談社、1994、137頁。

(8) 軍隊における訓練が近代的な身体形成と関わっていたという事情は、西洋諸国にしても同様であった。フランスの哲学者フーコーは、18世紀後半の西洋において軍隊が兵士の「従順な身体」を構築していったことについて次のような見解を示している。

「18世紀後半になるとどうかと言えば、兵士は造りあげられる或るものになっていて、人々は形をいまだなさぬ体質、不適格な身体でもって必要とする機械(つまり、人間機械)をつくったのであり、少しずつ姿勢を矯め直したのである。徐々にではあるが、計画にもとづく拘束が、身体各部にゆきわたり、それらを自由に支配し、身体全体を服従させ、恒久的に取扱い可能にし、しかも自動的な習慣となって暗黙のうちに残りつづける。要するに『農民の物腰を追放し』てしまい、かわりに『兵士の態度』を持込んだわけである。」(フーコー著・田村俣訳『監獄の誕生―監視と処罰―』新潮社、1977、141頁)

(9) 例えば、明治元(1868)年12月に田辺良輔によって著された『新兵体術教練』には、フランス式の軍事訓練の内容が詳述されている。本書においても「歩行」に関する注意書きが幾分確かめられるが、そこには「両臂を自然に垂らして之を脚の調子に従ひ右の脚を前に出すとき左の臂と同時に前へ出る如く左右交々に手足を相反し運動し…」(田辺良輔「新兵体術教練」『近代体育文献集成第Ⅰ期 第15巻兵式体操』日本図書センター、1982、13頁)という一節がみられる。

た「歩行」の特徴について検討を加えることにしたい。また、幕末期の日本では西洋式の軍事訓練としてオランダ式、イギリス式、フランス式のものが行われたとされているが、この中で比較的初期の段階で採用されたのがオランダ式の訓練であった⁽¹⁰⁾。このことを理由に、本稿では幕末期に実施されたオランダ式の軍事訓練を日本における歩行の近代化の端緒とみなして、これを研究対象として取り上げるものとする。

ここで、本稿に先行する関連論文を眺め返してみると、日本における歩行の近代化の問題を取り上げた研究はみられるものの⁽¹¹⁾、それらは幕末期の西洋式の軍事訓練にまで遡って詳しく論じられたものではなかった。また、幕末期における西洋式の軍事訓練に関して触れた論考もみられるが⁽¹²⁾、それは日本における体操の移入過程の前史として略述されている程度にすぎない。このような研究動向にあって、近世文学・思想史を専門とする野口武彦はイギリス式の歩行訓練の実際に触れているが、野口をしてもその訓練で実施された歩行の特徴の検討にまでは及んでいない⁽¹³⁾。

(10) 明治期を待たずしてオランダ式の軍事訓練が子どもにまで普及していた地域もあった。例えば万延元（1860）年から1年余り、日本と清国の都市を中心に植物採集旅行をしたイギリス人のフォーチュンは、長崎の町で祭りの行列に遭遇した際に次のような光景を目撃している。

「私は目抜き通りを行列について行き、丘の中腹にある大きな寺まで登った。そこでは子供達の軍隊が、規則正しい方式で、さまざまな演習をしていた。それが万事沈着に行われて、どの子供も微笑すら浮べない大まじめな顔つきで、オランダ式の模擬演習をしていたので、私は愉快になった。演習が終わると、急に高調になった楽隊に合わせて、小さな兵隊は活発に彼らの家路に行進した。」（フォーチュン『江戸と北京』三宅馨訳『幕末日本探訪記』講談社、1997、35～36頁）

(11) 稲垣正浩「近代の身体概念―『歩行』運動の分析をとおして―」『身体論―スポーツ学的アプローチ』叢文社、2002、111～259頁。吉田裕『日本の軍隊―兵士たちの近代史―』岩波書店、2002。

(12) 東京教育大学体育史研究室編著『図説 世界体育史』新思潮社、1964、248～258頁。木下秀明『スポーツの近代日本史』杏林書院、1970、3～8頁。大場一義「新しい身体練成法としての体操の成立―医学・教育・軍事面に影響を与えた洋式体操の導入と影響―」『生活文化』6号、1985.1、67～73頁。大熊廣明「わが国学校体育の成立と再編における兵式体操・教練採用の意味―明治・大正期を中心として―」『筑波大学体育科学系紀要』24号、2001.3、57～70頁。

(13) 野口武彦「幕府歩兵隊―幕末を駆けぬけた兵士集団―」中央公論新社、2002、68～73頁。

また、明治29（1896）年11月発行の『風俗画報』には「旧幕府の陸軍」というタイトルで、西

そこで本稿では、幕末期におけるオランダ式軍事訓練の歩行の特徴を史料に基づいて明るみに出し、その「近代的」(＝西洋的)な歩行が日本古来の歩行とどのような点で異なっていたのかを比べてみることにしたい。このことが明らかになれば、日本古来の歩行が近代的なるものへと変化していく過程で、どのような点の改変が余儀なくされたのかを知る手掛かりが得られよう。

2. 基本史料(『生兵教練書』1866年)の概要

近世は泰平の世であったといわれるが、幕末期になると内政、外交、国防上の問題から軍備の必要性が増してきたため、幕府は安政3(1856)年3月に江戸府内の築地に講武所を設けた。これを契機に、従来の槍術や剣術に加えて砲術・銃隊訓練が重視されるようになった。すると、訓練実施のためのテキストの必要性が叫ばれ、多くの「教練書」が出版される。当初はオランダ式の教練書が選び取られ、これを和訳したものが出回り全国の諸藩に普及していった。そこで本稿では、検討のための基本史料として、日本人の手によって翻訳されたオランダ式の教練書の類を使用することにしたい。具体的に本稿が用いるのは、『生兵教練書』(山口県立山口図書館所蔵)である⁽¹⁴⁾。

本書の見開き部分には「生兵教練^(ママ)記 元千八百五十七年式」と記されているが、この1857年(安政4年)とは原書の刊行年である。翻訳書としての『生兵教練書』が刊行されたのは、慶応2(1866)年のことであった⁽¹⁵⁾。表紙(図1参照)に「長門練兵場蔵版」と記されていることから推して、この練兵場においてオランダ式の軍事訓練を実施する際に本書が使用されたものと思われる。

洋式軍事訓練の回顧談が掲載されている(蓬軒居士「旧幕府の陸軍」『風俗画報』127号、東洋堂、1896.11、5～7頁)。この文章からは、歩行訓練の実際を詳細に知ることはできないものの、そこには「駢足運動」なる訓練が行なわれていたことが記されている点は注目してよい。

(14) 平成18(2006)年2月1日に筆者は山口県立山口図書館において史料調査を行なった。当館の許諾を得て『生兵教練書』の原物をデジタルカメラで撮影したものを、本稿では史料として用いている。なお、今のところ本書の著者ないし翻訳者は特定できていない。

(15) 笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』吉川弘文館、1962、647頁。

る。また、幕末期の長州藩では高杉晋作によって奇兵隊が挙兵されているが、その「稽古規則」のなかには西洋式の訓練も含まれていたことから⁽¹⁶⁾、その訓練時に本書がテキストとして用いられていた可能性もあり得る。

ともあれ、本稿が取り上げる『生兵教練書』はあくまで翻訳書であって、そこに記述された内容がそのまま日本人の訓練において実施されたのかどうかは定かではない。しかし、後で検討するように、本書には訓練時における歩行上の要点が詳細に説明されているので、その記述内容によって軍隊式の歩行の特徴を知ることができると思う。

なお、この『生兵教練書』はこれまで日の目をみなかった史料であるが、オランダ式の教練書で本書のごとく歩行に関する要点が事細かに記されているものは稀である。その意味でも、本書には史料的な価値を認めることができよう。



図1 『生兵教練書』の表紙（筆者撮影）＊

＊『生兵教練書』長門練兵場、1866（山口県立山口図書館蔵）より転載。

(16) 古河薫『長州奇兵隊—栄光と挫折—』創元社、1972、72～73頁。

(17) 『生兵教練書』長門練兵場、1866、16丁（山口県立山口図書館蔵）。

次に、『生兵教練書』の構成を確かめておきたい。本書を用いて行なわれる訓練の順序と概要は「教練ノ區別」という項目に次のように記されている（図2参照）⁽¹⁷⁾。

「先ツ生兵教練ヲ分テ三部ト為ス其第一部ハ新兵未タ執銃セザル以前ニ教ユヘキ諸件ヲ載ス○第二部ハ技藝装填及ヒ點放ヲ載ス○第三部ハ整頓ノ原則、正面行進諸種ノ歩法、側面行進、周旋及ヒ方向變換ノ原則、ヲ載セタリ又更ニ各部ヲ分テ四教トス」

このように、『生兵教練書』は「三部」から成り各部が「四教」に分かれていることがわかる。とりわけ、第一部には「執銃セザル以前ニ教ユヘキ諸件」つまり銃を手にする前に必要な訓練の概要が記されているのであるが、ここに「歩行」の訓練が含まれていた。



図2 『生兵教練書』に記された「教練の區別」の部分（筆者撮影）*

※『生兵教練書』長門練兵場、1866（山口県立山口図書館蔵）より転載。

さて、本書の冒頭には目次が掲載されているが、その内容は表1のように整理することができる。これによると、具体的に歩行に関して説かれているのは、第一部の第三教に含まれた「直行常歩ノ基本」及び「常歩基本ノ理解」である。ここに示された「基本」を習得できれば、次は「常歩ノ長短及ビ遅速ヲ好ク熟練シタルトキハ直ニ之ニ急歩ヲ教フベシ」⁽¹⁸⁾と記され、第三部第二教の「急歩」の訓練へと移る。ただし、この急歩の意味するところは後に速度の面から明らかにされるように、いわゆる「駆け足」ではなく「早足」程度のものであったと思われる。このほかに、本書の中で歩行に関する詳細な記述は見当たらないので、当時のオランダ式軍事訓練においては「走る」ことに関する具体的な訓練は実施されていなかったと考えねばならない⁽¹⁹⁾。

以上が本稿の基本史料である『生兵教練書』の概要であるが、次に本書の分析を通してオランダ式軍事訓練の歩行の特徴に迫ってみたい。

表1『生兵教練書』の構成*

第一部	第一教	執銃セザル兵士ノ體制及ビ頭首左右ノ運動ノ兵士體制ノ理解
	第二教	右向左向及ヒ右轉背
	第三教	直行常歩ノ基本ノ常歩基本ノ理解
	第四教	斜行進ノ基本
第二部	第一教	執銃法ノ基本ノ執銃ノ理解
	第二教 技藝	十二節装填法ノ足畔建銃ノ體制ノ銃ノ點檢ノ技藝ノ理解
	第三教	四節装填法及ビ急装填法
	第四教 諸般點放	小隊點放ノ各列點放ノ二列點放ノ點放ノ理解ノ第二部中ノ理解
第三部	第一教	整頓ノ原則ノ第一教中ノ理解ノ
	第二教	正面行進ノ急歩ノ急歩ノ理解ノ第二教中ノ理解
	第三教	側面行進ノ第三教中ノ理解
	第四教 方向變換	周旋ノ信地周旋ノ行進間周旋ノ折旋ノ第四教中ノ理解

※『生兵教練書』長門練兵場、1866（山口県立山口図書館蔵）より作成。

(18) 『生兵教練書』長門練兵場、1866、95丁（山口県立山口図書館蔵）。

(19) しかし、この事実は幕末期の西洋式軍事訓練全般において「走る」という動作に関する訓練が

3. オランダ式軍事訓練にみる歩行の特徴

ここでは、『生兵教練書』における歩行の特徴を「歩行の速度」及び「歩行の要点」という観点から整理することにした。前述したように『生兵教練書』はオランダの書物を和訳した史料であって、日本人の訓練を前提として記されたものではない。しかし、そうであったればこそ西洋的な歩行の特徴をダイレクトに窺うことができ、なおかつ日本人のそれと比較するに足る史料であると見なされよう。無論、翻訳作業にあたっては、訳者による何らかの解釈がはたらいていた可能性は否めないが、それを確かめることは極めて困難であることを理由に本稿はその点にまで立ち入って論じるものではない。

3-1 歩行の速度

『生兵教練書』には歩行の種類として「常歩」「急歩」の2つが取り上げられ、各々の「歩幅」および1分間の「歩数」が示されている。常歩については「常歩ノ長短ハ(大約二尺三寸)六十八拇トス 但シ踵ヨリ踵ニ至ル迄ヲ算ス而メ其遅速の度ハ『ミニユート』間ニ七十六歩ナリ」⁽²⁰⁾と記されているように、歩幅は2尺3寸(=約69.6cm)、1分間に76歩の歩数が適当であるとされている。一方、急歩に関しては、「急歩ノ長短ハ常歩ニ同シ然トキ其時限ハ『ミニユート』時間ニ百八歩トス」⁽²¹⁾とあり、歩幅は常歩と同様(2尺3寸)であるが歩数は1分間に108歩とテンポが上がっている。

上記の情報をもとに、この条件で1分間歩いた場合と1時間歩いた場合の移動距離を計算したものが表2である。これによると、「常足」の1分間の移動距離(=分速)は約52m90cm、1時間の移動距離(=時速)は約3km173m

行なわれなかったことを意味するものではない。幕末期の日本ではオランダ式に続いてイギリス式の軍事訓練が採用されるが、その教練書のひとつに『英国歩兵練法』がある。本書における歩行訓練には、「遅足」「早足」と並んで「駆足」という種類がみられることから、イギリス式の訓練では「歩く」ことだけでなく「走る」ことに関しても教授されていたことが窺える(赤松小三郎訳『重訂 英国歩兵練法』秋田屋太右衛門、1866、筑波大学中央図書館蔵)。

(20) 『生兵教練書』長門練兵場、1866、27丁(山口県立山口図書館蔵)。

(21) 『生兵教練書』長門練兵場、1866、95丁(山口県立山口図書館蔵)。

表2『生兵教練書』にみる歩行の速度*

種類	歩幅	1分間の歩数	移動距離	
			分速	時速
常歩（遅速）	69.6cm	76歩	52m90cm	3km173m76cm
急歩	69.6cm	108歩	75m17cm	4km510m8cm

※『生兵教練書』長門練兵場、1866（山口県立山口図書館蔵）より作成。

76cmという値が算出された。一方、「急歩」の方は分速が約 75m 17cm、時速が約 4km 510m 8cm であった。

さて、以上の検討によって『生兵教練書』が示す歩行の速度が明らかになったのであるが、この数値は幕末期の日本人の感覚に照らしてみるとどの程度の速度だったのでしょうか。そのことを知るためには、当時の日本人が日常的にどの程度の速度で歩いていたのかを提示して比較をすることが最も当を得た手法であろう。しかし、そのような情報を得ることは近世の場合に限らず今日においても容易ではない。そこでここでは、近世の「旅」の移動が主に徒歩によっていたことに鑑み、近世後期頃の旅日記を用いて当時代に生きた人々の歩行の速度を確かめてみたい。

『生兵教練書』との比較を前提として旅人の歩行の「速度」（分速と時速）を求めるためには、1日の旅程において移動に費やした「時間」と移動した「距離」を知ることができる旅日記を用いなければならない。この条件に合う旅日記として、ここでは『道中日記帳』⁽²²⁾（1829）を取り上げる。

『道中日記帳』は文政12（1829）年に武蔵国多摩郡狹間村（現・八王子市）の鈴木佐平次という19歳の男性が伊勢参宮の旅をした際の記録である。この旅日記はとりわけ往路の在地～伊勢間に関して詳細な記述が確かめられ、そこには日ごとの宿場の出発時刻とその日宿泊した宿場への到着時刻が明記されているので、この出発時刻から到着時刻までの間隔は当日の歩行可能な時間と見なすことができる。また、1日に移動した宿場間の距離の検討によって日ごと

(22) 鈴木佐平次「道中日記帳」『江戸時代の庶民の旅 鈴木佐平次道中日記』古文書を探る会、1981、7～16頁。

の歩行距離を読み取ることも可能である。そのため、旅人が歩いた「距離」を歩行可能な「時間」で割れば、ここで知りたい歩行の「速度」が大まかな値として算出されるところとなろう⁽²³⁾。

上記の方法をもって導き出された『道中日記帳』の在地～伊勢間（往路）における日ごとの歩行速度は表3のとおりであるが、平均値を求めてみると分速が約 45.6 m、時速が約 2.6kmであった。無論、歩行の速度とは個人差に帰結する問題であろうが、本稿では便宜的にこの数値を近世の旅人の歩行速度とし

表3『道中日記帳』にみる歩行の速度*

日時	区間	時間	歩行距離	歩行速度	
				分速	時速
2月25日	在地～伊勢原	不明	35.1km		
26日	伊勢原～畑	不明	43.7km		
27日	畑～原	13時間54分	26.4km	31.6m	1.8km
28日	原～江尻	13時間54分	41.1km	49.2m	2.9km
29日	江尻～金谷	不明	48.1km		
30日	金谷～見付	12時間45分	28.9km	37.7m	2.2km
3月1日	見付～浜松	5時間48分	16.4km	47.1m	2.8km
2日	浜松～吉田	13時間54分	36.9km	44.2m	2.6km
3日	吉田～岡崎	11時間35分	31.2km	44.8m	2.6km
4日	岡崎～樹木寺	15時間35分	44.2km	47.2m	2.8km
5日	樹木寺～桑名	10時間25分	25.3km	40.4m	2.4km
6日	桑名～上野	11時間35分	40.7km	58.5m	3.5km
7日	上野～伊勢	13時間16分	44.4km	55.7m	3.3km
平均値		12時間16分	35.6km	45.6km	2.6km

※鈴木佐平次「道中日記帳」(1826)『江戸時代の庶民の旅 鈴木佐平次道中日記』古文書を探る会、1981、7～16頁より作成。

表中の歩行可能な時間を算出するために、旅日記に記された不定時法の時代の時刻を便宜的に定時法の時刻に置き換える作業を要したが、その際には橋本万平の研究（『日本の時刻制度』塙書房、1966）を手掛かりとして用いた。また、『道中日記帳』には宿場の出発及び到着時刻が記されていない日もあるので、その場合は表中の当該箇所に「不明」と記載し、歩行速度の方は空欄とした。

(23) ただし、この場合は旅人が茶屋で休憩した時間や名所見物等に費やした時間が考慮されていないので、ここで導き出される速度はあくまでおおよその傾向であることは予め断っておかねばならない。

て把握することにした。

こうして明るみに出された旅人の歩行速度と『生兵教練書』が示す歩行速度とを比較してみると、後者の方が速い速度であったことが判然とする。したがって、道中の歩行が旅人にとって無理のない速度であったとすれば、オランダ式の軍事訓練における歩行の速度は当時の日本人の感覚からするとやや「速い」ペースであったと推測されよう。

3-2 『生兵教練書』にみる歩行の要点

前項では、オランダ式の軍事訓練における歩行の特徴を「速度」という観点から検討したが、今度は形態面から歩行の「要点」について考察するものとした。

『生兵教練書』において歩行の要点について詳しく解説がなされているのは、表1でいえば、第一部第三教「直行常歩ノ基本」の中に含まれた「歩法規則ノ理解」という部分である。当該部分は歩行の要点としてまず見出しを掲げ、次いでそれに関する解説を加えるという形式をもって記述されている。そこで、その内容を原文のまま抜き出して表4を作成した。

以下では、表4に掲げられた各項目に対して順に検討を加えていくが、その際、可能な限り近代化以前における日本人の歩行の特徴と比較検討することを試みたい。これによって、西洋式の歩行訓練を日本人の歩行の近代化との関わりの中で理解できると考えたためである。

しかし、「歩行」という日常の習慣的な動作に関して、近代以前の日本人が意識的に記録することは稀であったため、日本人の手による史料からその歩行の特徴を知ることは極めて困難である。先に日本人の歩行の「速度」を旅日記を用いて明るみに出したが、歩行の「様態」となると適当な史料は見当たらない。この史料上の限界に鑑み、ここでは幕末～明治初期頃の訪日外国人の見聞録を手掛かりとして用いることにしたい。彼らは西洋化以前の日本人の生活実態を自国文化との比較においてつぶさに観察しているが、そこには歩行の様態に関する記述も少なからず見られるためである⁽²⁴⁾。

①「足先ヲ下面ニ向ケ」

表4 『生兵教練書』にみる歩行の要点*

見出し	解説
足先ヲ下面ニ向ケ	如是足先ヲ下面ニ向ルハ膝ヲ伸シ足ヲ地上ニ平置スルノ預備トスルナリ
足先ヲ外面ニ回向スルノ些少ナルハ	是レ兵士両足ヲ多ク外面ニ回向スルトキハ身軀是ガ為ニ動揺シ易キガ故ナリ
身軀ノ上部ヲ前面ニ屈ス	是レ身軀ノ重量ヲ地上ニ下着セル足ニ委托シ次に後足ヲ挙ルコト容易カラシメ且ツ其歩度ヲシテ短縮セサラシメンガ為ナリ
膝ヲ伸ス	是レ新兵ヲシテ規制ニ適フノ歩調ニ習熟セシメンガ為ナリ
足ヲ地上ニ近ク沿フテ歩ヲ進ムベシ	若シ新兵其足ヲ過度ニ挙ルトキハ徒ニ時刻ヲ費シ空ク疲労スルガ故ナリ○又タ若シ一人他人ヨリモ脚ヲ高く挙ル時ハ其足、衆ト共ニ齊ク地上ニ下ラズ且ツ歩法ノ時限ヲ失ヘバナリ
足ヲ脊突スルコトナク平ニ地上ニ下着ス	若シ足踵先ツ地ニ下リ或ハ其足ヲ脊突スル如ク地上ニ下着スル時ハ必ず身軀動揺シテ歩度モ亦短縮ス是コレヲ防ク良法ナリ且ツ脊突スル如ク足ヲ下着スレハ徒ニ疲労スルノ害アリトス
頭ヲ正直ニス	此軀制ハ肩ノ振回ヲ防キ兵士ヲメ方正ニ行進セシムルモノトス

※『生兵教練書』長門練兵場、1866(山口県立山口図書館蔵)より作成。

この見出しは、足首を反さずに爪先(「足先」)を地面に向けて歩行するよう指示したものであるが、解説部分によればこの動きは、膝を伸ばして足を地面に平行に下ろす(「平置」)ための準備動作であるという。

16世紀末に来日したポルトガルのイエズス会士フロイスは、西洋文明との比較において「われわれの間では足を全部地につけて歩く。日本では、足の半分の履物(足半—引用者注)の上で足の先だけで歩く。」⁽²⁵⁾との観察記録を認めた。フロイスのいう「足を全部地につけ」る歩行とは、まさに軍事訓練におけ

(24) 前述したように、以前筆者は、当該史料の分析を通して近代化以前における日本人の歩行の特徴を抽出することを試みた(拙稿、前掲論文)。その結果、訪日外国人が指摘した日本人の歩行の特徴として、引き摺り足、歩行の音、爪先歩行、前傾姿勢、小股・内股歩行、奇妙な歩き方、といった諸項目が浮かび上がってきた。ただし、訪日外国人が見聞の対象としたのは主に「都市」に居住する人々であり、なおかつ見聞の対象とした人の身分や生業にまで及んで記録した者は稀であった。したがって、本稿において軍事訓練にみられる軍事的な歩行と日本人の歩行とを比較する場合、そこでいう「日本人」とは広く都市の人々を指していることに留意しなければならない。

る「足先ヲ下面ニ向ケ」て足を地面に「平置」する歩行形態と符号し、この動作が軍隊のみならず西洋的な歩行の特徴であったことが窺える。

一方、フロイスの言うように日本人の歩行が「足の先だけで歩く」という特徴を有していたとすれば、この足を地面に「平置」という動作は、日本古来の歩行とは明らかに異なる特徴であったといわねばならない。

②「足先ヲ外面ニ回向スルノ些少ナルハ」

これは歩行の際に足先を外側に向けすぎてはならないというほどの意味であろう。その理由を解説部分から探してみると、足先を過度に外側に向けてしまうと歩行時に身体が揺れ動くからだという。

イギリスの女性旅行家バードは、「日本人は、西洋の服装をすると、とても小さく見える。どの服も合わない。日本人のみじめな体格、凹んだ胸部、がにまた足という国民的欠陥をいっそうひどくさせるだけである。」⁽²⁶⁾と記録している。バードは日本人に洋服が不似合いであることを説明しながら、「国民的欠陥」の一つとして「がにまた足」という特徴を指摘したのである。

近代以前の日本人が「がにまた」の歩行習慣をもっていたとすれば、歩行時の足先は外側を向いていたことになる。ゆえに、歩行訓練においてこの点は否応なしに矯正されたと考えねばならない。

③「身軀ノ上部ヲ前面ニ屈ス」

この見出しから判断すると、上半身を前傾させることがオランダ式歩行訓練

(25) フロイス「日欧文化比較」岡田章雄訳『アピラ・ヒロン日本王国記 ルイス・フロイス日欧文化比較』岩波書店、1965、518頁。

なお、フロイスのいう「足半（あしなか）」とは、足の裏を保護するためや作業をしやすくするために作られたといわれ、足の指と踵は完全に台座からはみ出しており、爪先で力を入れやすいように工夫された履物のことである（潮田鉄雄『ものと人間の文化史 8 はきもの』法政大学出版局、1973、213頁）。「スパイク」として大いに利用されたともいわれている（宮本馨太郎編『図録 民具入門事典』柏書房、1991、21頁）。

(26) バード「日本未踏の地」高梨健吉訳注『日本奥地紀行』平凡社、2000、37頁。

では良しとされていたようである。訪日外国人の見聞録によれば、歩行時の前傾姿勢は当時代の日本人の持つ特徴であったと思われる。ある者は「日本人がまっすぐな姿勢で歩いたり、あるいは立ったりするのを一度も見かけなかった。必ず身体を半ば前に屈めて、…」⁽²⁷⁾との感想を残し、またある者は日本人の「姿勢はやや前かがみ」⁽²⁸⁾であることを指摘しているからである。

それゆえに、日本人は歩行訓練において「身軀ノ上部ヲ前面ニ屈ス」ことに關してはさほどの違和感はなかったと考えられる。

④「膝ヲ伸ス」

これは、「足先ヲ下面ニ向ケ」の項目の解説にも見られる表現であることから、軍隊式歩行においては欠かせない要点であったといえよう。この点について記した訪日外国人は管見では見当たらないので、ここでは文化人類学者の野村雅一による見解を引いておきたい。野村は「日本の民衆の伝統的姿勢—この場合、主として明治期まで人口の大多数を占めていた農民を問題にしている—は、腰をかがめ、あごをつきだし、四肢がおりまがった姿であった。歩くときもひざはまがったままであり、腕の反動も利用することはない。」⁽²⁹⁾と言及している。また、スポーツ史家中房敏朗も絵画資料の分析を通して近代以前の日本人が「膝折り姿勢」で歩いていたことを指摘した⁽³⁰⁾。

諸氏が指摘するように、近代以前の日本人が膝を曲げた状態で歩いていたのであれば、オランダ式軍事訓練における「膝ヲ伸ス」という指導によって、日本人は少なからぬ歩行の改変を余儀なくされたことになるう。

⑤「足ヲ地上ニ近ク沿フテ歩ヲ進ムベシ」

(27) ゴンチャロフ「フレガート・パルラダ」高野明・島田陽訳『ゴンチャロフ日本渡航記』雄松堂出版、1969、463頁。

(28) マローン「日本と中国」眞田収一郎訳『マローン日本と中国』雄松堂出版、2002、49頁。

(29) 野村雅一『しぐさの世界—身体表現の民族学—』日本放送出版協会、1983、14頁。

(30) 中房敏朗『「ナンパ」考—歩き方にみる日本的特性—』『仙台大学紀要』28巻1号、1996、10、23～31頁。

この見出しは、歩行時に足を上げすぎること戒めたものである。その理由は解説部分に「若シ新兵其足ヲ過度ニ挙ルトキハ徒ニ時刻ヲ費シ空ク疲労スルガ故ナリ」とあるように、足を上げすぎると余分な時間を費し疲労の原因となるためであるという。

また、解説の後半部分には「若シ一人他人ヨリモ脚ヲ高ク挙ル時ハ其足、衆ト共ニ齊ク地上ニ下ラズ且ツ歩法ノ時限ヲ失ハバナリ」とあり、一人だけが足を高くあげてしまうと、ほかの兵士と歩調が揃わなくなることが記されている。これは、軍事訓練においては集団で隊列を組んで一糸乱れぬ「行進」が目指されていたことを意味するが、実のところ近代以前の日本人にはそのような習慣はほぼ皆無であった。

そのことを見抜いたのが、アメリカの動物学者モースであった。モースは東京の市街を行き交う人々の歩行に関して「男も女も子供も、歩調をそろえて歩くということを、決してしない。(中略) 我国では学校児童までが、歩調をそろえるのに、日本人は歩くのに全然律動が無いのは、特に目につく。」⁽³¹⁾と記録しているからである。モースがいう日本人の「全然律動が無い」歩き方と、冒頭で述べた「ナンパ」との関連性は詳らかにしないが、幕末期の日本人が軍事訓練における「行進」に当惑したであろうことは容易に想像がつく。

⑥「足ヲ脊突スルコトナク平ニ地上ニ下着ス」

この要点は、先の「足先ヲ下面ニ向ケ」の指示と連動している。そこでは足を地面に平行に下ろす（「平置」）ための準備動作として、爪先を下に向けておくよう指示されていたが、ここではその次の動作として足を「平ニ地上ニ下着ス」という点が強調されているのである。

この点が押さえられていないと「必ズ身軀動揺シテ歩度モ亦短縮ス」とされ、なおかつ「徒ニ疲労スルノ害アリトス」と記されている。つまり、足を地面に平行に下ろさなければバランスを失い歩度も短縮してしまうばかりか疲労

(31) モース「日本その日その日」石川欣一訳『日本その日その日 3』平凡社東洋文庫、1971、218頁。

の原因にもなるというのである。バランスを保てない歩行は、軍隊の「行進」には不適合であったといわねばならない。

⑦「頭ヲ正直ニス」

この「頭ヲ正直ニス」とは解説に「此軀制ハ肩ノ振回ヲ防キ兵士ヲメ方正ニ行進セシムルモノトス」とあるように、肩の振じれ（「振回」）を防ぐために頭部を正面に固定したまま歩行するよう指示したものである。

演劇評論家の武智鉄二は、日本古来の歩行（＝ナンバ）を農耕生産の姿勢と結び付けて次のように説明してみせた⁽³²⁾。

「右足が前に出る時は、右手が前に出るという言い方は、ナンバの説明によく用いられる方法だが、正しくは右半身が前に出るといったほうがよい。つまり、農耕生産における半身の姿勢（たとえば鋤をふりあげた形を連想してみるとよい）が、そのまま、歩行の体様に移しかえられているのである。だから、右足が出た時は、右肩、あるいは右半身も、前に出ていると考えてよい。」

上記の説明は、史料的な裏付けが乏しく信憑性を欠いたものではあるが、今日ではこの分野において市民権を得ているといってよい。武智の見解によれば、近代以前の日本人は肩を振じった姿勢（半身）の連続的動作で歩いていたことになる。したがって、軍事訓練において教授された肩を振じらない歩行法は、いわゆる「ナンバ」的な歩き方を不可能ならしめる要素をもっていたといわねばならない。ここに日本古来の歩行の主たる特徴が封じ込められたのである。

以上述べてきたように、幕末期のオランダ式軍事訓練における歩行と日本古来の歩行とは明らかに異質なものであった。その意味では、明治期以降に軍隊

(32) 武智鉄二「伝統と断絶」『伝統と断絶（新装復刻）』風塵社、1989、28頁。

や学校教育において本格的に推し進められる歩行訓練が、日本人の歩行の近代化に果たした役割は大きかったといわねばならない⁽³³⁾。

4. 結び

本稿は幕末期のオランダ式の軍事訓練における歩行の特徴を『生兵教練書』(1866年)に基づいて検討し、その「近代的」(＝西洋的)な歩行と日本古来の歩行との相違点を探ろうとするものであった。検討の結果は以下のとおりである。

『生兵教練書』には歩行の種類として「常歩」と「急歩」の2つが取り上げられ、各々の「歩幅」および1分間の「歩数」が示されていた。これをもとに計算してみると、その条件で歩いた場合の時速は「常歩」が約3.1kmで「急

(33) 明治期以降の日本人は、軍隊や学校における訓練を通して「近代的」な歩行に触れていった。しかし、日本人はそう易々と近代的な歩行文化を受け容れたわけではなかった。例えば、軍隊の歩行訓練にしても兵士たちは西洋の軍隊式歩行を容易に習得しえたわけではない。昭和2(1927)年に出版された陸軍兵士向けの冊子には、「みなさんは要領がよいから圖のやうな姿勢をして上官から直される事は決してありますまい。こゝに三頁にわたつて出でゐる圖は二三十年前の新兵さんの中に、往々あつた形だと思つて下さい。」(陸軍省つはもの編輯部編『「ほまれ」の煙一つはもの漫画一」織田書店、1927、14～16頁)と前置きしたうえで、「直される新兵姿」として多くのイラストが掲載されている。文中に20～30年前とあるので、これは1900年前後を意図しているものと思われるが、その中の1枚に左手と左足を同時に出して歩く兵士の姿が描かれ、「いくら整頓するのがよいからとて手と足と揃へて出しちや困る これはやつぱりたがいがいいに出すがよい」との一文が添えられている(同上書、14頁)。また、「蛙の悴でも無いのに歩調をとる時蛙股」という文と合わせて「がに股」で歩く兵士の姿が描かれたものもみられる(同上書、16頁)。このことから、明治維新から30年ほどが経過した当時においても、行進の際に同側上下肢を同時に前に出して歩く新兵や、がに股で歩く新兵が後を絶たなかったと推測されよう。その事情は20年ほどの月日を経てさほど変化することはなかった。大正11(1922)年に岡千賀松が著わした『國家及國民ノ體育指導』には「正シキ姿勢、正シキ歩法、殊ニ直線歩行ヲ完全ニ實施シ得ルモノハ極メテ少數ナリ。(中略)歩行セル人ヲ見ルニ前後左右ノ動揺、屈曲及上下ノ高低實ニ不規則ニシテ、一見重苦シキ感ヲ生シ、其ノ身體ノ如何ニ輕快性ヲ有セサルヲ知ルヲ得ヘシ。」(岡千賀松『國家及國民ノ體育指導』陸軍戸山学校将校集會所、1922、249～250頁)と記されている。岡によれば、当時代の日本人の歩行は、前後、左右、上下に不規則に揺れ動き、「一見重苦シキ感ヲ生シ」ていたという。

歩」の方は約 4.5km であった。一方、この数値を当時代に生きた日本人の歩行速度と比較すべく、近世後期頃の旅日記を用いて旅人の歩行速度を検討してみると、時速約 2.6km という数値が算出された。したがって、オランダ式の軍事訓練における歩行の速度は当時代の日本人の感覚からするとやや「速い」ペースであったと推測されよう。

次に『生兵教練書』に記された歩行の要点を整理し、それを当時代における日本人の歩行の特徴と比較しながら考察した。オランダ式訓練の歩行の要点は次の7つであった。①膝を伸ばして足を地面に平行に下ろすための準備動作として、足首を反さずに爪先を地面に向けて歩く。②歩行の際に足先を過度に外側に向けてはならない。③上半身を前屈みにして歩く。④膝を伸ばして歩く。⑤集団で隊列を組んで「行進」するときに他の兵士と歩調を合わせる必要性から、歩行時に足を高く上げすぎてはならない。⑥足を地面に対して平らに下ろす。⑦肩の振じれを防ぐために頭部は正面に固定したまま歩く。このうち、歩行の様態からみて日本人の歩行と大きく違わなかったのは③のみで、その他の①②④～⑦の要点は幕末期における日本人の歩行の特徴とは明らかな相違点が見られた。

—たにがま ひろのり・法学部講師—